

渋沢栄一が生きた時代 一田無・保谷の歴史のあゆみ一

～渋沢栄一“^{ゆかり}縁の人”たちの志の跡を追う ～展示概要編～

[展示の内容]

■ 渋沢栄一“^{ゆかり}縁の人”たちと田無・保谷

■ 渋沢栄一“^{ゆかり}縁の人”たち

〔田無の地で“徳川家再興”を誓う！〕 渋沢成一郎、渋沢平九郎、尾高惇忠



しぶさわせいいちろう
渋沢成一郎

天保9(1838)年
大正元(1912)年
(享年)74歳

栄一の2歳年上
従兄(幼名:喜作)

彰義隊頭取
振武軍頭取
東京商法会議所設立
東京商品取引所理事長
実業家

^{ゆかり}
渋沢栄一“縁の人”

- ・元治元(1864)年に栄一とともに一橋家に仕官。
- ・烏羽伏見の戦いに軍目付として参加。その後、江戸に戻って彰義隊の頭取に就任。
- ・彰義隊副頭取の天野八郎らと対立し、彰義隊を離れ、田無村で振武軍を結成し、その頭取となる。
- ・飯能戦争で敗れた後、伊香保に逃れ、江戸へと戻り、旧幕府海軍の榎本武揚に合流し、土方歳三らとともに函館戦争に参戦するが投降。
- ・明治5(1872)年1月に出獄。栄一のすすめにより大蔵省勸農寮に出仕。
- ・蚕業調査のためイタリア・スイスへ留学し、帰国後に麴米問屋や生糸売込問屋を営む。
- ・実業家として活躍。



しぶさわへいくろう
渋沢平九郎

弘化4 (1847) 年
慶応4 (1868) 年
(享年) 22 歳

栄一の妻・千代の弟
見立て養子 (相続人)

彰義隊・第二青隊伍長
振武軍中軍組頭

ゆかり 渋沢栄一“縁の人”

・渋沢平九郎は尾高惇忠、栄一の妻・千代の弟で、栄一や成一郎の従兄弟にあたる。

・亡くなる一年前の慶応3 (1867) 年正月に、栄一がフランスに渡る際に栄一の見立て養子となる。

・成一郎や兄・惇忠と行動を共にして、彰義隊を経たのち、田無で結成された振武軍に加わる。

・飯能戦争で振武軍本営・能仁寺が炎上、平九郎は裏山の天覧山を越えて敗走。

・顔振峠から越生・黒山に出たところで、明治新政府軍の広島藩兵に取り囲まれ、自刃。

・栄一は帰国後、平九郎の遺骸を谷中の渋沢家墓地に改葬。

・帝国劇場・創立委員長となった栄一は、平九郎の生涯の記録を作成し、平九郎の壮絶な死を題材とする演劇を帝国劇場で上演する。

・栄一のこれらの活動が、飯能戦争を世に広めることにつながった。



尾高惇忠・平九郎生家

深谷市提供



お だかしゅんちゆう
尾高惇忠

文政 13 (1830) 年

明治 34 (1901) 年

(享年) 70 歳

栄一の従兄 (10 歳年上)

栄一の妻・千代の兄

振武軍・会計頭取

・軍目付

富岡製糸場初代場長

第一国立銀行

・盛岡支店支配人

・仙台支店支配人

ゆかり 渋沢栄一“縁の人”

・“日本近代資本主義の父”と言われる渋沢栄一を形作った尾高塾の師匠であり、栄一の妻・千代の兄。

・喜作 (成一郎) とともに、田無で振武軍を結成。会計頭取・軍目付など幹部として、振武軍頭取・渋沢成一郎を支えるが、飯能戦争で敗れ、生まれ故郷の武蔵国下手計村に戻った。

・明治維新後は、民部省に入り、その後、富岡製糸場の初代場長となって日本の製糸産業の発展に貢献した。

・惇忠の次男・尾高次郎は、渋沢栄一の娘の文子を妻とした。

・次郎は第一国立銀行に入行後、現在の埼玉りそな銀行にあたる武州銀行を創設。

・次郎の六男・尾高尚忠は、作曲家・指揮者として活躍し、その次男

尾高忠明は指揮者として大河ドラマ「青天を衝け」のテーマソングの指揮をつとめている。

■ 展示資料紹介

・ 渋沢史料館:提供写真資料

渋沢喜作 (成一郎)、渋沢平九郎、尾高惇忠

尾高惇忠・平九郎生家、下手計尾高家二階座敷